

Title	Elemir Bourges とパリ・コミュニケーション
Author	中島, 廣子
Citation	人文研究. 39 卷 5 号, p.271-286.
Issue Date	1987
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Elémir Bourges とパリ・コミューン

中 島 廣 子

I

ワーグナーの大作のオペラ「ニーベルンゲンの指輪」のうちより、*Le Crépuscule des Dieux*⁽¹⁾「神々の黄昏」という表題を借り、普墺・普仏戦争前後の時代のヨーロッパ社会の動きを自己の小説中に活写してみせた Bourges は、才能ある作家として、一躍、注目を集めるようになった。その後、彼はパリより、フォンテーヌブローの近くのセヌに臨む、もとは司祭館だった古い館に移り住み、Stéphane Mallarmé, Armand Point, Odilon Redon, Edouard Dujardin, Joséphin Péladain らと交流を保ちながら、深い思索と美的探求に耽る日々を送り、十年近い歳月を費やして、次なる作品 *Les Oiseaux s'envolent et les Fleurs tombent*⁽²⁾「落花飛鳥」(1893)を完成させたのであった。このタイトルは、Hervey de Saint-Denis による杜甫などの漢詩の仏訳詩集からヒントを得たものであり、Gisèle Marie は Rheng-Tsen の作であるとしているが、実際には杜甫の友人、岑参 ^{ツェン ツァン} Cén-Cān の「白髮悲花落 青雲羨鳥飛」からとったものであろう。⁽³⁾そして作者によれば、Holbein の「死者の舞踏」のごときイメージを持つ、哲学的な小説を目ざしたと言う。⁽⁴⁾

ところで前作 *Le Crépuscule* が、第一章と最終章をのぞいて、万国博覧会で賑わうかたわら、繁栄に陰りの見えてきた第二帝政末期のパリを舞台とし、普仏戦争勃発の時点までを主として扱っていたのに対し、この作品では、それに続くパリ・コミューンの動乱の首都の有様が冒頭に描写されており、前作の続編的性格を持つことがうかがわれるのである。さらに、小説の構想の点からみても、*Le Crépuscule* が、十九世紀後半の西ヨーロッパ社会の動きを背景にしたスケールの大きいものであったが、三部からなる長編小説 *Les Oiseaux* は、さらにその範囲をひろげ、作品の主要な舞台にスラブ社会をもとりあげ、なおかつアメリカ、アジア、アラブにまで及ぶグローバルな視野のもとに書かれていて、世紀末独特の耽美的な美意識に裏うちされ、イ

ンド哲学などの影響もうかがわれるなど、実に多彩な要素が盛りこまれているわけである。従って、こうした作品は、様々な角度からのアプローチが必要となろうが、今回は、特に小説の出だしの部分に描かれたパリ・コミューンの最後の、いわゆる「血ぬられた週間」と呼ばれる時期と、その後日談に関わる箇所をポイントをしぼってみることにした。

なお、比較的最近に出版されたパリ・コミューンに関する二冊の研究書、すなわち Paul Lidsky 著の *Les Ecrivains contre la Commune*⁽⁵⁾、ならびに William Serman 著の *La Commune de Paris*⁽⁶⁾ のいずれの中にも、Bourges のこの作品の一節が引用され、「反コミューン作家」としてのレッテルが貼られてしまっているが、そうした評価が当を得たものであるのか否かについても考えてみたいと思ひ、ここに小説の紹介を兼ねて眺めてみることにしよう。ただし、その前に、あら筋を述べておかねばなるまい。

十九世紀半ば、ロシア皇帝の弟 Fédor フォードル大公とその妃 Maria-Pia マリア=ピアは結婚後ほどなく一子をもうけたが、この世継ぎの君は、大公の愛人の奸計により、生まれおちるや攫われて、宮廷侍医の義弟の手でフランドルにおいてひそかに育てられていた。Floris フロリスと名づけられた主人公は、自らの出生の秘密を知らぬまま成長し、青年になってパリに移住し、普仏戦争に巻こまれ、九死に一生を得る。いっぽう、行く方不明の我が子を思う愛情深いマリア・ピア妃は、母としての長年の苦心と執念が実を結び、遂にその消息をつかみ、忠臣を遣わして探し出させる。だが、おりしもパリは人民戦線の混乱の最中、おのれが高貴な身分の出であるとも知らぬフロリスは、皮肉にもコミューンの闘士として戦っていた。そして、ヴェルサイユ側の捕虜になったところを、無事、助け出され、プラハの母の居城へと連れ戻されるのである。ところが、冷酷な父の命により政略結婚を強いられ、また後に母方の財産問題をめぐっても大公と激しく衝突し、反目し合うようになる。ただ偶然にも、花嫁と定められた女性が、かつてバルト海のリューゲン島で出会い、主人公がひそかに恋こがれていた、心優しく清らかな Isabelle イザベラという娘だったことがわかり、この悲運の貴公子にもようやく幸運の女神が微笑みかけるかにみえる。

愛し合う新婚の二人は、聖職者の道を選んだ弟の José-Maria ジョゼ=マリアと盲目の妹 Tatiana タチャーナはじめ、大勢の取り巻きの人々にかこまれて、古代の遺跡の点在するアドリア海沿岸の風光明美なダルマチアで、

甘美な逸楽に満ちた夢のような日々を送る。だが主人公の宮廷には、母の死を境に、いつしかまた悲劇のかけがしのびよるのである。貞淑な妻の懐妊をよそに、フロリスの心は次第に奔放な義妹 Josina ジョズィナのほうへと傾いてゆく。彼女は宮廷出入りの芸術家 Giano ジアーノに誘惑され、愛するようになるが、この遊び人の男は実は大公の隠し子であり、腹違いの兄弟二人の間に愛憎の入りまじった確執が生じ、遂にフロリスが義妹を犯し、ジアーノを決闘で殺す羽目になる。そして夫と妹の不倫の現場を目撃してしまったイザベラが、ショックのあまり階段から落ちて死んでしまう。その間に、父も世を去っており、妹までが後を追うように天に召され、とり残された主人公は、ひとりの忠臣を共に流浪の旅に出て、罪深い愛におののき悔恨の念にさいなまれつつも、義妹とアメリカで再婚する。そこから船で日本や中国・インドなどを経て、紅海にいたるが、嵐にあつて遭難し、義妹は天の裁きを受けたかのように命を失ってしまい、自らをこの世につなぎとめていた最後の絆を絶たれたフロリスは、忠臣の諫めも聞き入れず、アラビア半島の砂漠の只中にある人類の始祖エヴァの塚と伝えられる所へと消えてゆくのである。

II

Bourges は、この小説の前書きで、当時のフランス文壇に極端な写実主義がはばをきかせ、文芸作品の面白味をそこなってしまったのを遺憾とし、むしろ英国のエリザベス朝演劇を再評価し、そこから多くのものを学ぶべきだとの考えを述べ、自己の作品創作にあたって、これを手本としたと記している。すでに *Le Crépuscule* の中でも、ヒロインの歌姫が 'Tis Pity She's a Whore を朗読する場面などがあり⁽⁷⁾、小説全体を通してその影響が感じられたが、*Les Oiseaux* になると、よりいっそう明確に演劇的構成に基づく展開がなされることとなる。短いプロローグに続く第一部は、三つの書 Livres から成っていて、その最初の場面が炎上するパリでの物語で、まことにドラマチックな幕開きであると言えよう。

ヴェルサイユ正規軍にパリを包囲され、コミュンの闘士らが最後の死闘を繰りひろげた1871年5月末、市内の高台にあるペール・ラシェーズの墓地より見下ろした市街地の夜景がまず描写されている。

夜空は常ならぬ色を帯び、一面に赤く染まっていた。そんな空のもと、家々の屋根も尖塔も大建造物も、何もかも区別なく大いなる坩堝と化して、火焰を吹きあげるのだった。(…)はるかに望む市街地は無人の都市さながらの感があり、青白く、また硫黄を思わすような炎が音もなくドームの上をなめてゆく。業火の下のほの暗い奈落の底からは、一条の光たりとも漏れ出でず、赤く照らされた薄闇に、至るところ無残にうち捨てられた廃墟が見てとれた。(8)

夜空を焦がす紅蓮の炎に焼かれたパリの街が、登場人物の目には「この世の地獄」そのままに映り、それが正しく舞台の書割りの役目を果たし、いくつかのエピソードをつなぐ際に繰り返して現われるのである。そして衰えを知らぬ大火は、破壊と革新の二面性をあわせ持つ革命のエネルギーの象徴であるかのように、噴煙をあげ溶岩の流れ出る火山のイメージをもって示されている。

空は凄まじい様相を呈していた。黒煙が風によって、真っ赤に燃える怪物のごとく吹き流されてゆき、そのいっぼうで、火焰の舌が勢いも激しく震える大気をつきつけて高く伸びるのだった。パリの中心部がぐるりと火の海につつまれてゆく様は、車輪にくくりつけられた松明が回転してゆくかのようだった。パレ・ロワイヤルが炎上し、チュイルリー宮は横腹を大きくえぐられ、まばゆい火炎を吹きあげており、その真西に、ロワイヤル街が明々と浮かびあがっていた。ときにセーヌの左岸では、オルセー河岸にリール街、レジオン・ドヌール宮殿などが真紅の火の海にたゆたい、かたや東の方では、市庁舎が巨大な火の玉と化して燃えているのであった。見はるかす地平線の端から端まで、どこもかしこも坩堝のごとく燃え盛り、爆発を起こし、地鳴りのような轟音がとどろき、パリは溶岩の海に浮かんでいるかに見えた。かなたかなた網の目状に走る街路が、一面の緋色の広がり、黒く深い裂け目をくっきりと刻みつけていた。(9)

さらには、パリの街をなめ尽くす大火を背景にして、同じフランス人同志が殺し合い、文字通り血で血を洗う殺戮の地獄絵図が繰り返されるが、あたかも火事の火自体が人間世界の悲劇を喜び、それを煽動し、おびただしく流される人民の血を己れの糧とし、自己の力をうれし気に天なる神にむかっ

て誇示する、悪魔の姿を思わせるところもある。

その時、風が唸りをたてて吹きおろし、空に鳴り渡った。猛炎は荒れ狂う嵐にも似たごうごうたる音を天空に響かせ、圧倒的な火の勢いは突風にあおられ、さらにかきたてられ、巨大なトルソーそのままの火柱があちこちにあがった。あたかも大火という悪魔どものえがく円陣が、ぐるりと市街をとり囲み、歓喜の吠え声をあげながら、その化け物じみた長い舌を空高く伸ばすみたいに見えるのだった…。(10)

こうした雰囲気の中で、コミューン側とヴェルサイユ側の双方の部隊がぶつかり合うのであるが、イッシー保塁やビュット・オ・カーユでの攻防戦のいきさつが作中でふれてあったり、モンマルトルとかオステルリッツあたりの緊迫した状況が登場人物の口をかりて語られるなど、Zolaの*la Débâcle*に勝るとも劣らぬ、ダイナミックな動きと迫りに満ちたスペクタクル性をそなえているのである。そして、バリケードをはさんでにらみ合う両軍がいどみかかるシーンでは、修羅の巷そのままの有様が見られる。

(…) 戦闘が再開された。砲声が落雷のごとく轟き、砲弾は炸裂し、火の雨を降らせた。けたたましく打ち鳴らされる早鐘。ごろごろと転がされてゆく砲台。その音にまじって、あたりをつんざく一斉射撃の鋭い銃声。と、ものすごい声があがったかと思うや、両軍が怒濤のごとく襲いかかり、ぶつかり合った。死屍墨墨として横たわり(…) 戦う兵士らの周囲では、罵声や苦しい喘ぎ声、雄叫びなどが入り乱れ、太鼓の音がうち交じり、怒号が飛びかい、彼等は喧騒の嵐の渦中であつた。(11)

また他方、この作品には、当時のヨーロッパ社会でロンドンと並んで中心的地位を誇っていたパリの、国際色豊かな一面も盛り込まれている。戦時非常体制下の当時であっても、多くの外国人が様々な方面や社会階層の中で暮らしており、当然、パリ・コミューンの歴史のページにも多数の外国人の名前が記されているのは周知の事柄である。たとえば、コミューンの最後の時に逮捕された外国人が1,725名、そのうち737名がベルギー人⁽¹²⁾であったと言うが、主人公フロリスがベルギーから移り住んだことにしたのも、そうした事実をふまえてのうえであろう。おまけに彼は、この時点では、自分が本

当はロシア人であることを知らず、後にそれが判明するのだが、実際にコミューンにはスラブ系の人々も多く加わっていたようで、作品が書かれた時代のフランスでも、ごく自然な事として、抵抗なく受け入れられたはずである。小説の中にも、実在の人物が何人も登場するが、主人公の友人という設定で、かの有名なポーランド人の闘士 Wroblewski ウロブレフスキの名が出てきたり、コミューン敗北後の後処理の問題を Thiers ティエールが語る場面で、この暴動に荷担したとしてヴェルサイユ体制側に処刑された Prince Wiazelusky ヴィアゼルスキ、Prince Bagration バグラチオーンの両殿下の例が引き合いにだされたり⁽¹³⁾、一般の兵士の中にも「ポーランド」などという、それらしき仇名を持つ人物を配していたりする。それに加えて、ドイツ系のユダヤ人が小説の冒頭に登場し、終わりまで重要な役割を果たすことになる。この男は、古着を商い、それでしこたま儲けて巨万の富を築き上げるのである。こうした人々をからませる事により、当時のパリの雰囲気が生き生きと伝わる効果が得られていよう。

III

さて、作品のドラマ性を盛りあげているものには、上にあげたような事柄のみではなく、もうひとつ大きな要素が認められる。それは、パリ・コミューンに参加した女性たちの存在である。史実的にみても、彼女たちの活躍ぶりや敗北後の悲惨な運命は、様々な形で今日まで語り継がれてきている。Louise Michel らの著書⁽¹⁴⁾によると、彼女らはパリの危機をまのあたりにし、支援のための呼び掛けに応じて、救援隊の看護婦や炊き出し係としてコミューンの兵士らを助け、激戦の最中にあっても、夫や愛人らにつき従って、彼らとともに銃をとって戦ったり、バリケードを築いたりして、大いに奮闘したということだが、この小説中にも、そうした女性の登場人物が出てくるのである。まず、さきにふれたユダヤ人の商人とともに、ペール・ラシェーズの墓地の場面で、狂言まわしの役を演ずるのが、cantinière の Eloi エロワ婆さんである。この老女はどうやら産婆らしいが、一般の女性たちとは異なり、酒保係としてセバストポルの戦いにも従軍したという台詞からすると、元は一種の職業軍人のような女だったのだろう。彼女はせっせと主人公の世話を焼いたり、戦場をフロリスを探し求めて歩いたがためスパイと間違えられた、ロシア大公妃の忠臣を助けようとしたりする、おおらかな人情

あつい典型的な庶民
この市民戦争の犠牲
それに比して、
らぬ墓地で、真近
に葬る女たちの姿
(pétroleuses-Mess
箇所である。敗色
刑し、銃殺された
いるペール・ラシ
き女たちが狂言を
りか、反コミュニ
あり、いささか

突如、ほか
のスターンを
売や狼の群れ
気に見せつけ
ある兵士が
の上から真紅
ルコ風長剣を
をしてみせ
しに入り乱
よろつかせ
が抜かれ、
けてゆき、
った騎兵外
色や緑の
飛んだり群
ちは、半狂
わめき散
せるのだ
れて、か
なり、そ

あつい典型的な庶民の女として描かれている。そして、敵の砲弾に当たり、この市民戦争の犠牲となり、無残な最期をとげるのである。

それに比して、流血を思わせる赤く燃えたつ空のもと、死の象徴にほかならぬ墓地で、真近に迫りくる自己の死を意識しつつ、束の間の生の orgie に酔う女たちの姿も描かれている。いわゆる、《pétroleuses-bacchantes》、《pétroleuses-Messalines》事件と呼ばれるものにヒントをえたと思われる箇所である。敗色濃いコミューン陣営の兵士らが自暴自棄になって捕虜を処刑し、銃殺されたばかりの死体をのせた荷車や、砲弾とか薬莢のころがっているパール・ラシェーズの丘で、たむろする兵士らとともに、娼婦とおぼしき女たちが狂態をさらす、かなりきわどいシーンなのだ。そして、このくだりが、反コミューン的であるとの非難をうける根拠になった問題の箇所でもあり、いささか長くなるが、以下に引用しておこう。

突如、ばかでかい図体のひとりの連盟兵が、大きな石棺に飛び乗り、紫のズータンをまとった死体のうちの一体を両手で思いきり高々とかけ、虎や狼の群れと化したパリの叛徒らに、己れの牧者たるものの屍を誇らし気に見せつけた。

ある兵士が踊りだした。その男が銃で曲芸をやってみせると、白い肩衣の上から真紅のスカーフを巻き、穴あきだらけのスカートに金メッキのトルコ風長剣をさげた女がひとり、男の真前に進み出て、淫らな格好の仕草をしてみせた。(…)二人の男女は酔い痴れた。男も女も年寄りも、誰彼なしに入り乱れ、大きく輪になって踊り出し、ぼさぼさ頭に髭面で目玉をぎょろつかせた群衆がぐるぐる回ってゆくのが見られた。そのうちに樽の栓が抜かれ、黒い酒を二つの鍋に受けた。踊り狂う者たちは、そこに顔をつけてゆき、また前にも増して激しく踊るのであった。石油でごわごわになった騎兵外套をはおった黒人が、左右に首をくねくねふるかと思えば、黄色や緑のサテンの服を着て、豊満な胸に白粉をはたいた五、六人の娼婦が、飛んだり跳ねたり、腿もあらわにスカートをめくったりする。やがて女たちは、半狂乱の体におちいった。口から泡をふき、サーベルを握りしめ、わめき散らし、空を切ったり、バッカスの巫女メナドのごとく身をくねらせるのだった。何人かの女が摑み合いを始め、たちまち中のひとりが倒されて、かえす刀で肩を落とされかけた。ところが、喧嘩相手が飛びかかるなり、その腹に足をかけ、腕をひきちぎって、遠くへ投げ捨てた。すると、

残りの女たちまでが、皆して、わっと襲いかかり、ある者は足を、ある者は手をもぎ取って、自分のサーベルで寄ってたかって生贅を細切れに切り刻んでしまった。そうして狂ったように笑っては、鞠かなんぞのように、びくつく手足を投げ合ったので、血まみれの肉の塊が見るも無残に墓の鉄格子や木々の枝にひっかかった。また、ある女は心臓をひっ掴み、細身のサーベルの先に突き刺すと、踊りの輪の中をあっちこっちと走りまわり、「さあさ、たったの二スーだよ、キリスト様の心臓が」とわめくのであった。その声をよそに、焰に焼かれる夜空の下、踊りは激しく熱を帯び、とどまるどころを知らなかった。⁽¹⁵⁾

数あるパリ・コミューン関連文献のうちで、イデオロギー的偏りを極力排し、客観的資料や数字に基づき、コミューンに関わった女性たちの問題を取りあげた Edith Thomas の *Les Pétoleuses*⁽¹⁶⁾ には、彼女たちが当時置かれていた状況が様々な角度から詳細に検証されている。こうした女たちは、ヴェルサイユ側の政治宣伝上の意図もあり、首都炎上の放火犯人であるとされ、手当たり次第に逮捕され、投獄または処刑されていたようであり、言うなれば十九世紀の「魔女裁判」の如き性格を帯びていたのであろう。たとえば、バケツやミルク・ポット、瓶などに石油をいれて持ち運び、あちこちの家々に注ぎかけ、火を放つところの挿絵が新聞などにのせられ、巷に出回ったのである。⁽¹⁷⁾ おまけに、ごく一部の娼婦らの行動をことさらセンセーショナルにとりあげ、悪意に満ちた描写をし、あたかもパリ防衛に立ちあがった身近な男たちを支援しようとした女性のすべてが、皆そうであるかのように書きたてたのである。Thomas の指摘によると、「Maxime du Camps や他のヘボ作家らが罵詈雑言をありったけ浴せかけ、激情にまかせた中傷で飾りたててくれた。」すなわち、「《le diable noir》のような北アフリカ原住民兵を囲んで、ヒステリックに踊り狂い、おぞましい魔女の輪舞をやっている女たち」の例があげられている。⁽¹⁸⁾ 実際 du Camps の報告では

男と女がひとりずつ、互いに向いあって踊り始めた。すると、それを合図にしたように、一団の者たち全員が動き出した。歌い、わめき、暴れ回り、淫らな身振りを繰り返しつつ(…)この気違いの群れが、そうした踊りに我も我もと加った。(…そこへ三人の女が)汗をしたたらせ、珍妙な服装で、胸をはだけたも同然の格好で、男から男へと歩きまわり、時々、『飲

物だよ!…」など
と記されており
ことだろう。Lissa
誌からの引用文が
女たちが、息も絶え
また、二十世紀に
た Da Costa の
そのひもまでが後
端でさばいてみせ
から、当時の新聞
作者が、気付かな
ただし、さきに
家]であるとされ
の創作になる「
ちているからで
死という図式、
れずして、単な
きる。さらに、
が高々とかけ
れとても作品の
は、その象徴
messe de san
っているから
とする作者の
お、Henri L
を強く帯びて
かれたコミュニ
イスム」を題
を挿入したの

物だよ！…』などと叫ぶのだった

と記されており⁽¹⁹⁾、これが本作品にヒントを与えていることは否定できないことだろう。Lissagaray の *Histoire de la Commune de 1871* には、*Patrie* 誌からの引用文がのせられているが、それによると、「見るもけがらわしい女たちが、息も絶えだえの将校の胸をナイフを用いてまさぐった」とある。⁽²⁰⁾ また、二十世紀になってからの出版物ながら、コミュンのパルチザンだった Da Costa の著書にすら、包囲下のパリの街頭に娼婦たちが繰り出し、そのひもまでが後ろについて歩き、殺されたばかりの将校の馬の肉を、その場でさばいてみせた事件のことが載せられているのである。⁽²¹⁾ そんな有様だから、当時の新聞はこうした話題には事欠かぬわけで、それらを読み漁った作者が、気付かなかったはずもなからう。

ただし、さきに引用した箇所によってのみ、Bourges を「反コミュン作家」とするときめつける批判は、的外れな気がする。何故なら、象徴派作家の創作になる「文学作品」のテキストとして読みこむ作業がそこには抜け落ちているからである。舞台装置としての墓地と大火、極限状態における生と死という図式、「死の舞踏」という小説のライト・モチーフなどを考慮に入れずして、単なる歴史的ドキュメントのような扱いをするのは無理がありすぎる。さらに、人質として処刑されたパリ司祭の遺骸を、コミュンの兵士が高々とかかげて仲間に見せる場面の描写も槍玉にあがっているのだが、これとても作品の第二部でダルマチアの原住民の抗争事件の場面を一読すれば、その象徴的意味が即座にわかるはずである。すなわち、彼らが行なう *messe de sang* のくだりと、第一部のこの箇所が見事、対応する構成となっているからである。⁽²²⁾ また、エリザベス朝演劇のイメージを念頭に置いたとする作者の意図も、完全に無視されてしまったことになりはしまいか。なお、Henri Lefèvre が、コミュン固有のスタイルとして「祭り」の性格を強く帯びていたと規定しており、Léon Cladel の小説 *I. N. R. I.* に描かれたコミュンの光景を引き合いにだし、「祭りをかざるある種のエロティスム」を感じとっている点も興味深く⁽²³⁾、Bourges が上記のような描写を挿入したのも一理あると思われる。

IV

さて、この小説でパリ・コミューンに関わる記述の部分は、上にあげた第一の書と、それに続く第二の書に見出されるわけであるが、Bourges が「反コミューンの」であるとする例の二人の研究者は、第一の書の問題の箇所のみをとりあげ論じているだけで、奇妙なことに、何故か第二の書にはふれようとはしていない。ところが、そこにおいては、コミューン側に加担し捕虜となった者たちの、流刑地での苛酷なまでの処遇のされ方を克明に描ききっているのである。

まづ最初に、ヴェルサイユ体制側の行政長官ティエールが登場し、ロシア皇帝の従兄弟であることが判明した主人公フロリスの釈放をめぐる、ロシアの高官とかけひきがなされ、続く場面において、コミューン生き残りの闘士たちが流刑の憂き目にあい、辛酸をなめ、悲惨極まりない生活を余儀なくされる有様が書き綴られている。ヴェルサイユ軍に捕えられた彼らは、かろうじて銃殺を免れたものの、荒縄でつながれ、ヴェルサイユまで連行され、あちこちの牢獄にぎゅうぎゅう詰めに押し込められ、そのあげくフランス各地の牢に送りこまれ、ニュー・カレドニアにまで流されたりしている。「辱しめられ、憎悪され、犬以下の扱いしか受けなくて」⁽²⁴⁾ いたようで、Lissagaray がいみじくも述べている如く、「死せる者は幸いなるかな。彼らは捕虜たちのカルワリオの丘を登らずともよかったのだから」⁽²⁵⁾ と言うほどであったらしい。

小説中では、捕虜となった主人公がロッシュフォールの近くのピエール・モワーヌ島に流され、「シャラント号」という廃船牢に入れられるのだが、この島の名前は架空のもので、André Lebois は恐らく Ile d'Oléron ではないかと推定している。それに、Ile Dieu などという島の名も作中に見出されるが、これは Ile d'Yeu か Ile de Ré あたりの島であろうとしている⁽²⁶⁾。ともあれ、八月の炎天下での廃船牢の内部の様子を、どう作者が表現しているか目を通してみよう。

廃船牢ではあまりの猛暑に、囚人たちが舷側の鉄格子のところへ、たとえわずかの時間でも汗のしたたる顔を押し当てに来て、少しでもましな空気を吸い込もうと鈴生りになるのだった。

こもる一方の熱気に、皆は衣服を脱ぎすて、素っ裸のまま汗にまみれ、ごろごろ寝ころがるだけで、疲弊していった。照りつける灼熱の太陽に、船のタールは溶け、木部が裂けるほどだった。おまけに、波ひとつなく溶けた金属を思わせる海面は、ぎらぎらと照り返し、ゆらめきたつ熱い大気とあいまって、見渡す限り目もくらむばかりに光って見えた。大きな蠅がうるさく飛びまわっていて、それに刺された三人の囚人は、ひどく腫れあがり、あげくに死んでしまった。

その死骸を海に投げ込んだものの、上げ潮にのって海岸に打ちあげられたため、ロッシュフォールから司令が出て、以後、土葬にすることになった。月曜ごとに雑役用の小艇が現われた。これら腐敗した土色の死体をそこに積み重ねると、囚人らも班ごとに乗り込んで、『神島』の軟泥地に埋葬しに出かけるのであった。

死者の数が増えてゆき、二隻の廃船牢は、数日で、痩せさらばえ熱に震える病人であふれかえるようになった。

(…)

大抵の者は——赤痢患者で——満腹感を覚えることがなかった。猛烈な飢えに悩まされていて、下痢をしても、危険はないものと長いこと信じ込んでいた。だが遂に、病には勝てず、衰弱し切って、起き上がるだけで失神するほどだった。佻しく身を横たえ、海老のように腰を丸め、尻は糞便にまみれたままだった。目がとろんとしてきて、顔の肉がそげ落ちるか浮腫が出るかのいずれかで、皮膚は樹の皮みたいにざらざらになってしまう。そして誰しものが、わずかの間に、異常なほど痩せこけてゆくのだ。背骨が一行に浮いて見え、ペしゃんこの腹と腰とがくっついて、灰色がかったズックか何ぞかと見間違いうくらいで、身動きする度に、むかつくような悪臭をもらしていた。

墳墓にこもるむっとした臭いより、まだひどい臭いのたち込める廃船牢の中では、臭気が目にしみ、喉までやられてしまう始末なのだ⁽²⁷⁾。

と言ったような状態で、たまりかねた囚人らが通気筒を四、五本とりつけてくれるよう要求しても、司令官はこれを無視し、また腐乱した死体を船内に放置しているため、肉に蛆がたかり、チフスが蔓延し、「生き地獄」の様相を呈してゆく。Léon Deffoux の *Pipe-en-bois, témoin de la Commune* を読めば、「八月には、二百人の連盟兵が牢内で死んでいった。他の者たちは、

裁判もそこそこに、あわてて立ち退かされた。家畜移送車や貨物列車が、何百人もの連盟兵をあちこちの島や港へと運んでいった。牢獄が変わることは、悲惨さのありようが変わるということだ。廃船牢に移れば、貧血と下痢、リュウマチ、気管支炎などに悩まされるのだ。ロリアンでは腸チフスが、ことごとくの廃船牢を一挙に空にしてしまったほどであった⁽²⁸⁾」と書かれてあり、決して小説的誇張ではないようである。そして、André Leboisの説によると、こうした流刑地での囚人たちの生活ぶりを取りあげるに当たり、作者はコミューン関係の文献に頼るだけでなく、大革命の時期の資料であるL'abbé Louis-Marie Duboisの*Rochefort et les pontons de l'île d'Aix*から多くを学んでいると考えられ、特に、疫病が蔓延してゆく様子や、遺体を埋葬する場面などに、それがうかがわれるとし、上記の書物より引用比較してみせている。⁽²⁹⁾

そんな牢獄暮らしを余儀なくされた主人公に、牢仲間の「伍長」と呼ばれる老人が、血を分けた肉親にも勝る気遣いを示してくれ、何くれとなく世話をやき、親身になってかばってくれるのである。本当の父を知らないフロリスにとっては、ある意味で「理思の父親」のイメージを抱かせてくれる人物なのだ。この老人は熱烈なブランキの信奉者で、報いられることもない人生を送ってきていたが、それでもなお気のいい陽気な人柄で、すさんだ主人公の気持ちをやわらげてくれるのである。そして、ある晩、彼にこんなことを語ってきかせる。

「よう同志、なんでゆっくりと眠らしちゃあもらえんのだろうな。誰に縛られることもない、完ぺきに自由なはずの俺らだつてのによ！ 考えてもみな、牢におち込まれてる俺らのほうが、パリやロンドンを今時分ぶらついている連中よりゃあ、自由なんだぜ。なにせ、そいつら、気付いちゃあまいが、最も卑劣な独裁者に支配されてる奴隷なんだからな！ …」小柄な老人はそう語ると、からからと笑いとばし、牢仲間の彼に、じゃあな、おやすみと言った。⁽³⁰⁾

自由を抑圧する体制を嫌い、おかげで一生の大半を牢獄で過ごさねばならなかった、朴訥ながら強靱な意志をそなえた老「伍長」も、やがては肉体を蝕まれ、病に倒れてしまうことになる。壊血病のせいで、骸骨のように痩せ細り、遂にあの世へと去るのだが、それでもこう言い残し、息をひきとる間

際まで、己れの信念を断固、貫き通すのである。

「なあ、若い。俺ら、ひとに服従するよりゃあ、ぶたれたり、罰をくらうほうが、ましだと思ってたぜ！…なあに、しれたことだからよ…は、は、は、根っから自由に生まれついてるらしいな…二十三回ムショ入りしても、俺らから自由を奪ったなんて、どこの誰にも言わせねえで生きてきてやったさ！…は、は、は！…ざまあみやがれ、暴君め！…自由で、一生、自由で通してきてやった！…二十三回ムショ入りしててもだぜ、フロリス！」とあざ笑ってみせるのだった。⁽³¹⁾

無学な一介の庶民にすぎぬ彼だが、卑俗な政治の世界の荒波に翻弄されつつも、いかなる逆境にあらうと自己の精神の高貴さを失うことなく逝く、この人物を描く時の作者の筆からは、やはり孤高の作家として生きんとした者の、共感と愛着のほどがにじみ出ているように感じられてならない。いずれにせよ、ここまで作品を読み進んでいたなら、Bourges が反コミューン的であるとする意見は出てくるはずもなかろう。さきにあげた研究者が、この部分に触れずにおいたのは全くもって不可解なことだ。また、さらに、もうひとつ付け加えておこなれば、第二の書の始めのあたりで、ヒューマンイズムの立場からコミューンに身を投じ殉死したスラヴの王侯に対する、敬意をこめた哀悼の言葉がティエールの台詞の中にも見当たり⁽³²⁾、作者が一面的にコミューンをとらえていたわけでないことは明かである。

V

以上、本論では、Bourges の *Les Oiseaux* という小説において、パリ・コミューンがいかなる描かれ方をしているかについて触れてきたが、作者自身、現実生活において、この事件と関わりがあったものかどうか知る必要があらう。Raymond Schwab のまとめた伝記によると、事件当時、作者は十九才で、父親の仕事の関係上、マルセイユの知事公邸に住んでいて、そこでコミューンの略奪を目撃しているようである。⁽³³⁾ 従って、パリのそれを実際に体験したわけではなく、おかげで他の作家たちに比して、希に見る客観的態度を記述に際して保ち得たと André Lebois は評している。⁽³⁴⁾ そして、作者がフィアンセに宛た1882年の手紙には、本作品執筆のため、*La Gazette*

des Tribunaux に目を通す必要があるとも書かれており、そこに掲載されたパリ・コミューンに関する記事を参考にしたことも明かになっている。⁽³⁵⁾ 無論、Lissagaray, Du Camps らの著作を参考に行っている点は言うまでもなからう。

さて Bourges は、この小説に限らず、処女作や *Le Crépuscule* においても、好んで戦争とか革命・政変などを取りあげ、そのいっぽうで豪奢と逸楽に満ちたきらびやかな世界を描き、そうした状況で露わにされる人間の二面性を執ように描いた作家である。つまり、この両極端のシチュエーションに登場人物を置くことは、人間性に秘められた相矛盾する要素を何よりも鮮やかに浮かびあがらせるための手段だったと思われる。「カタストロフィーとは、人間たちから、その最も純粋な叫びを引き出し得るものなのだ」と Raymond Schwab は述べているが⁽³⁶⁾ その最たるものがコミューンの最期であり、それに携わった人々の聖性と悪魔性、純粋さと獣性などが同時に描写されてゆくわけである。

作者の母親が若い日に東欧の貴族に仕えていて、たまたま政変に巻き込まれ、数奇な体験をした事実があるが、そんな思い出話を、幼い頃から絶えず聞かされたり、母が書付けておいたものを読んだりした記憶が、恐らく Bourges にこうした作品を書かせるきっかけになったと思われるが、やはり何と言っても、自分自身が多感な年齢にマルセイユで垣間見た経験から、人間というものを単純にとらえることを警戒する気持ちが強く作用するようになったのではあるまいか。だが、これは彼ひとりにとどまらず、表面はいかに華やかに見えようとも、普仏戦争の敗北とそれに続く内戦の時代の傷跡をひきずって歩かねばならなかった、世紀末のフランス人に共通した認識ではなかったか。従って、世紀末文芸評論家の Marie-Claire Bancquart は、この作品を次のように定義してみせている。

形而上学的小説 *Les Oiseaux s'envolent et les Fleurs tombent* は、はかない夢ながらも、集団が自らの根本的な弱点を自覚する以前に抱懐しうる最高の夢の意味を、パリ・コミューンに付与している。⁽³⁷⁾

そして、ここで言う〈faiblesse fondamentale〉「根本的な弱点」を否応なしに意識して生きざるを得なかったのが、世紀末の芸術家の宿命であるのだろう。

注

- (1) 以下、小説の題名は *Le Crépuscule* と略す。
- (2) テキストとしては Edition définitive, Mercure de France, 1964年版を使用。以下、本文中では *Les Oiseaux* と略す。ただし注においては、O. F. と略号を用いて記す。
- (3) 漢詩の出典に関しては、大阪市立大学文学部中国語・中国文学教室のご教示によるものである。
- (4) 1882年12月5日付の作者の手紙にそう記されている。(O. F. p. VII.)
- (5) P. Lidisky: *Les Ecrivains contre la Commune*, François Maspéro, 1970. ただし本論文では、1982年版を使用。p. 113. 及び p. 123.
- (6) W. Serman: *La Commune de Paris*, Fayard, 1986. p. 546.
- (7) *Le Crépuscule* 第四章。
- (8) O. F. p. 19.
- (9) Ibid., p. 34.
- (10) Ibid., p. 40.
- (11) Ibid., p. 35.
- (12) M. Du Camp: *Les Convulsions de Paris*, Hachette, 1878—1880. II pp. 306—307. P. Lidisky の前出の著作 p. 66. 及び大仏次郎著「パリ燃ゆ」(ノンフィクション文庫) 第五巻p. 119. 参照。
- (13) O. F. p. 47.
- (14) L. Michel: *La Commune*, Stock, 1898.
- (15) O. F. pp. 36—7.
- (16) E. Thomas: *Les "Pétroleuses"*, Gallimard, 1963.
- (17) *La Revue Blanche* の《Enquête sur la Commune》(Lissagaray の回答 p. 42. Mme Néro の証言 pp. 140-143. ただし本論では第二版を使用。) *Procès des Communards*, présenté par Jacques Rougerie, Collection Archives, 1978. *La Commune en Images 1871*, François Maspéro, 1982. 図版は Michel Lhopice: *La Guerre de 70 et la Commune en 1000 images*, Cercle Européen du Livre, 1965. p. 283 を参照。
- (18) E. Thomas の前出著作 p. 195. pp. 204—5.
- (19) M. Du Camp の前出著作 III p. 87.
- (20) Lissagaray: *Histoire de la Commune de 1871*, Librairie contemporaine de Henri Kistemaekers 1876, p. 433.
- (21) Da Costa: *La Commune vécue*, I, pp. 21—5. (E. Thomas の前出著作, p. 70より引用)
- (22) M. Mercier: *Les Oiseaux s'envolent et les Fleurs tombent*, Elémir Bourges et

le Conte noir, Colloque de Nantes, Librairie Minard, 1980. p. 74. では、作者はこうした技法を通じ、*«In n'y a ni histoire ni progrès, mais répétition du même au même»*だということを表現しているとの指摘がある。

- (23) H. Lefèvre : *La Proclamation de la Commune*, 1965. 「パリ・コムニオン」(河野健二・柴田朝子訳, 岩波書店 1968 p. 629.)
- (24) O. F. p. 52.
- (25) 前出著作 p. 440.
- (26) A. Lebois : *Les Tendances du Symbolisme à travers l'Œuvre d'Elémir Bourges*, l'Amitié par le Livre et le Cercle du Livre, 1952, p. 100.
- (27) O. F. pp. 53—4.
- (28) L. Deffoux : *Pipe-en-bois, témoin de la Commune*, les Editions de France, 1932, p. 224.
- (29) 前出著作 p. 101.
- (30) O. F. p. 49.
- (31) Ibid., p. 55.
- (32) Ibid., p. 47.
- (33) *Les Œuvres complètes d'Elémir Bourges t. I : Sous la Hache précédé de la vie de l'auteur R. Schwab*, François Bernouard, 1929, p. XIII.
- (34) 前出著作 p. 96.
- (35) *Les Œuvres complètes d'Elémir Bourges t. I*, p. LXX XII.
- (36) Ibid., p. CXXX.
- (37) M. -C. Bancquart : *Images littéraires du Paris «fin-de-siècle»*, aux Editions de la Différence, p. 56.

アランとの出会
シモーヌ・ヴェイ
文研への受養準備
刊したいという願
では、アランは毎
人か小説家)を選
1926-27学年度は
『イリアス』で
M.-M. ガザリに
た、『イリアス
「かがやかし
て、金の秤によ
愛すべき、おそ
している……』
アランのシモ
とごとしく論じ
ら、中心はほこ
トンには、あ
超越し、つねに
(âme)の自
ものを探りだ
において関係性
定するのは、
(âme)の
の弱さを指摘
はやくもこの